様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６９５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１６６７８

研究課題名（和文）身体障害者の観光の現状と阻害要因に関する実証的研究

研究課題名（英文）the present status and impediments to tourism of people with disabilities

研究代表者
韓　準祐（Han, Junwoo）

多摩大学・グローバルスタディーズ学部・専任講師

研究者番号：００７２７４７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：自宅における休養やテレビや映画、ドラマ、スポーツ等の鑑賞が身体障害者の主な余暇活動として行なわれている。観光の頻度に関しては、1年間、「1回か2回程度」が多く、旅行の際には家族が同行することが多い。身体障害者やその家族は、バリアフリー商品についてあまり知っておらず、知っていたとしても費用の高さや自由度の低さ等から利用したことがないという回答が多数を占めた。旅行・観光において最も苦労する段階に関する質問に対しては、回答者の約6割が観光旅行の最中に困難を直面すると答えており、準備計画段階の約1割を大きく上回った。回答者の約7割が改善点として観光施設のバリアフリー化を求めていることも確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
身体障害者の観光の現状と阻害要因を明らかにするための基礎的知見を示したことに意義があり、研究を継続することでより彼らの余暇活動を含む生活の側面までも見えてくると考えている。身体障害者によって行われる余暇活動は、自宅における休養が多く、テレビや映画視聴が占める割合も多かったが、他方では海外旅行の経験の豊富で、週末に必ずスポーツを楽しむ人も少なからずいた。また、彼らの観光における阻害要因の一つとして経済的な側面は確かに挙げられるが、旅行商品を選ぶ際に自由度も重要な要素であることも明らかになった。先入観や偏見なく彼らが行う観光を捉えると同時に、彼らの観光しやい環境づくりに役に立つ研究結果が得られた。

研究成果の概要（英文）：When people with disabilities were asked regarding their leisure activities, most of them sated that they spent time watching movies, dramas, sports, and games, at home on television. Most of the respondents indicated that they travel only once or twice a year, and when they travel, a family member take care of them. It was ascertained that most people with disabilities and their family members do not know about barrier-free tourism. Even the ones who are aware of it are not willing to pat the high-cost and are skeptical about the fixed plans offered. About 60% of the respondents said that they face difficulties on a trip, while 10% stated that they face difficulities in tour planning process. About 70% of the respondents memtioned that with barrier-fee tourism facilities, travelling could be more enjoyable.

研究分野：観光学

キーワード：身体障害者　観光　旅行　余暇　阻害要因

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本における障害者の旅行・観光に関する研究は、主に 2000 年代以降行われ、移動・交通、施設、情報アクセス等におけるバリアフリーに焦点を当てたものが主流を占めている。日本国内と国外の障害者の旅行・観光研究を比較してみると、2000 年代以降の障害者の旅行・観光研究の蓄積という特徴は、欧米の研究においては必ずしも当てはまらない。しかしながら、もう一つの特徴であるバリアフリーに関するテーマへの集中は共通している。

バリアフリー化されていない施設を含む環境的側面が障害者の旅行・観光の阻害要因になっていることが報告されているように（Berthold, 2005）、バリアフリー（接近性の改善）は障害者の旅行・観光を考察する上で必要不可欠であるが、それ以外の障害者の旅行・観光を取り巻く環境について殆ど注意が払われていないことが障害者の旅行・観光研究の特徴であると同時に課題であるといえる。既往研究において、必ずしも身体障害者の観光における阻害要因の詳細を究明するまでにはいたっておらず、障害者の旅行・観光を取り巻く環境に対する総合的考察の試みも十分ではないといえる。

２．研究の目的

本研究は、身体障害者の観光現状と阻害要因を明らかにすることを目的とする。身体障害者とその家族、観光をプロデュースする観光業者へのアンケート調査及びインタビュー調査を行う一方で、バリアフリーによるまちづくりで知られ、障害者の観光目的地としても注目されてきている岐阜県高山市への現地調査を通して、身体障害者の旅行・観光の現状を究明する。また、身体障害者やその家族が観光に出かけることを躊躇した経験、またそのような経験をした場合、どのような阻害要因が影響を与えたかをアンケート調査及びインタビュー調査、さらに彼らの観光行動への参与観察を通して解明する。

３．研究の方法

身体障害者（重複障害者を含む）の観光現状とそれを取り巻く環境及び阻害要因を定量的（アンケート調査と統計分析）･定性的手法（インタビュー調査と参与観察）を用いて究明を試みた。具体的には、週末に電動車椅子サッカーと車椅子バスケットボールを行う其々の団体の参加者に協力を求め、身体障害者とその保護者を対象にしたアンケート調査を行う一方、身体障害者のみならず、家族を含む介助者、障害者の観光をプロデュースする観光業者側（添乗員）、宿泊業者（ホテル従業員）等の関係者を対象にインタビュー調査も実施した。身体障害者本人に対するインタビュー調査は主に 3 名の肢体障害者（20 代、うち一名は重複）に対し、其々2 回ずつ行った（合計：約 10 時間）。他方、バリアフリー旅行に 2 回参加し、インタビュー調査と参与観察を行い、バリアフリー化の先進地域の岐阜県高山市と白川郷への現地調査も実施した。

４．研究成果

（１）　身体障害者の余暇活動の現状：観光の現状

１）アンケート調査結果

身体障害者とその保護者を対象にしたアンケート調査から、身体障害者の観光の現状を確認する。アンケート調査は、週末に電動車椅子サッカーと車椅子バスケットボールを行う其々の団体の参加者に協力を求め実施したものである。回答者は、身体障害者本人が 7 名（10 代：3 人、20 代 2 人、30 代 1 人、40 代：1 人、男性：6 人、女性：1 人）、保護者 5 人（40 代：3 人、50 代：2 人）であった。保護者に回答を求めた理由は、計画でも記したように身体障害者本人

の視点とは異なる保護者としての身体障害者の観光の現状と阻害要因に関する捉え方を確認するためである。他方では、保護者が回答したケースは、全て子どもの年齢が 10 代であり、加えてスポーツを実践しているなか、休憩時間等の限られた時間に回答をすることが現実的に困難だったこともあり、10 代の子供の代わりに保護者による回答を求めることになった。

障害の種類は、8 人が肢体、2 人が重複であった（重複：肢体と内部、聴覚・言語と肢体）。障害等級に関しては、1 級が 6 人、2 級が 3 人、3 級が 1 人で、2 人からは回答が得られなかった。現在、就労収入があるかという質問に対しては、1 人がある、9 人はないと答えた。現在の月別収入（①就労収入、②公的年金、③公的手当、④その他の収入等全てを含む）については、「10 万円以上 15 万円未満」2 人、「15 万以上 20 万円未満」1 人という回答が得られ、残りの 9 人からは回答が得られなかった。先述したように同調査においては 10 代の身体障害者が 8 人であり、就労収入がまだ得られておらず、公的年金や公的手当を含む収入の詳細を把握していないことが想定される。さらに、彼らの代わりに 5 人の親が回答しているが、月別の総収入は回答しづらい部分があったかもしれない。生活している場所については、9 人が家族と一緒に暮らしており、1 人が一人暮らしをしていると答えている（残り 2 名からは回答を得られていない）。

身体障害者の主な余暇活動が自宅における休養（3 人）やテレビや映画、ドラマ、スポーツ等の鑑賞（4 人）が約 6 割に及んだ。他方、調査に協力した調査対象者らが週末にスポーツに積極的に取り組んでいることもあり、外出しスポーツを実践するという回答（4 人）も約 3 割を占めた。他方、余暇活動として行なっていることについて、複数回答を求めた結果、「自宅等でテレビや映画、スポーツ等鑑賞」が 12 人、「自宅等で休養」が 10 人、「外出しスポーツの実践」が 10 名、「外出し映画、演劇、コンサート等鑑賞」が 9 人、「旅行および観光」が 8 人と回答が多かったのに対し、「自宅等で読書」が 5 人、「外出し美術館や博物館等見学」が 3 人という結果が見られた。

観光の頻度に関しては、1 年間、「1 回か 2 回程度」が 7 人（約 6 割）、「3 回以上 5 回未満」が 2 人、「5 回以上 10 回未満」が 1 人、「30 回以上」が 1 人、「全くない」が 1 人という回答が確認できた。海外旅行経験については、これまで「全くない」が 5 人、「5 回以上 10 回未満」が 3 人、「1 回以上 5 回未満」が 2 人、「10 回以上 30 回未満」が 1 人であった。「10 回以上 30 回未満」と回答したのは、アメリカへの留学経験があり、電動車椅子のクラブの代表・監督を務めている 40 代の男性であった。他方、保護者による回答を含めると、10 代が 8 人であり、海外旅行経験が「全くない」という回答も多かったと思われる。

観光に同行する人に関する質問に対しては、「家族」が 11 人、「移動介護従事者」が 1 名という回答が見られた（複数回答ではない質問だったが、2 つ以上を選んだアンケートに関しては、調査当日の同行者を確認し集計した）。

観光の際に主に利用する交通手段に関する質問に対しては、「車」が 11 人、「飛行機」が 8 人、「電車」が 6 人という回答が見られ、「船」は選択されなかった。クルーズ旅行等の経験に関する質問項目を設けていなかったが、船の利用はあったとしても限られることが確認できた。

旅行会社の観光（商品）の企画を依頼したことがあるかという質問に対しては、2 人（20 代の女性と 40 代の男性の身体障害者本人）があると答え、10 人はないという回答だった。また、旅行会社のパッケージツアー（募集型企画旅行）を利用経験については、3 人（10 代男性、20 代女性、40 代男性の身体障害者本人）があると答え、8 人はないと回答した（1 人回答無）。

バリアフリーツアー等、車椅子や杖を使い方も利用しやすい旅行商品が出ていることを知っているかに関する質問に関しては、4 人（50 代親 1 人、40 代親 2 人、20 代女性身体障害者本

院）が知っていると答え、8 人は知らなかったと回答している。バリアフリーツアー等の旅行商品の利用については、1 名のみ（20 代女性身体障害者本人）が「5 回以上 10 回未満」という利用頻度を選択した。

旅行会社のバリアフリーツアーを利用しない理由に関しては（複数回答）、「バリアフリーツアー（旅行商品）について知らなかった」6 人、「費用が高く利用しにくい」4 人、「自由度が低くあまり魅力を感じない」4 人、「そもそも旅行・観光に興味がない」1 人、「スタッフの対応等が不安で利用できない」を選択した人はいなかった。バリアフリー旅行商品に関しては、認知度の問題のみならず、費用や自由度の側面が影響し、利用されていないことが分かる。他方、「そもそも旅行・観光に興味がない」という答えは 1 人のみであることは、旅行・観光への関心・興味は低くないことも示されていると考える。その他の回答としては、「選べる種類が少ない」「家族で行くから」という記述が確認できた。

障害者関連団体や NGO 等が企画する旅行・観光に参加したことがあると答えたのは、2 人（50 代親・10 代子供、40 代男性障害者本人）であった。回答者の参加回数は、2 人とも「1 回以上 5 回未満」であった。

２）インタビュー調査結果

身体障害者へのインタビュー調査から得られた観光の現状を確認したところ、3 名の身体障害者（全員 20 代、インタビュー調査当時大学生）は、パッケージツアー（募集型企画商品）の利用は 1 名のみで 2 名は利用していないと答えた。パッケージツアーの利用経験がある 1 名も 1 回のみ、友人と利用したことがあると答えている。ただし、家族での旅行経験に関しては、2 名はとりわけ豊富で海外旅行も複数回経験している人もいた。インタビューに応じた電動車椅子を使う A は、短期海外研修（大学のプログラム）や短期英語研修の経験が豊富で、自分の障害者年金や手当を両親に管理してもらってはいるが、その金額、支払い時期等を正確に把握していた。車椅子は使わないが肢体に障害を持つ B は、交換留学プログラムを利用して国内の他大学で半年間学んだ経験をもち、海外交換留学も計画中であると語った。車椅子を利用する重複障害者 C は、それまでは海外旅行経験がなく、大学での短期海外研修プログラムに参加し、初めて海外に行く準備をしていた。全体的に個人差はあるものの、旅行会社のパッケージツアー（募集型企画商品）はあまり利用した経験がなく、他方で、家族で車を主に使った旅行経験は多数確認できた。なお、海外旅行経験も個人差はあるが、一人で海外に出る勇気や家族の理解等が必要で、早い時期に海外旅行（研修等の含む）を経験した場合、躊躇することなく海外へ出かけるケースも見られた。

他方、映画やタクシーの割引の利用経験やディズニランドのようなテーマパークに訪れる際、列に並ぶことなくアトラクションに乗れた経験も語られた。他方、両親以外の介助者と一緒に旅行に出かけると費用負担のみならず、介助者に気を遣うこともあると語った。

ただし、自らは旅行を積極的行うというよりかは、学習プログラムを利用したり、趣味のスポーツ実践や応援に出かけたりすることが多く、基本的にはインドアだと語る人もいた。

（２） 観光・旅行における阻害要因

１）アンケート調査結果

旅行・観光を準備・企画する段階において困難に直面したことがあるかに関する質問に対しては、8 人があると答えている（4 人は無いと回答）。旅行・観光を準備・企画する段階における困難の詳細については（複数回答）、「情報へのアクセス（バリアフリー情報等）」7 人、「費

用面での負担」3 人、「魅力的なパッケージツアー（募集型企画商品）がないこと」2 人、「時間的余裕がないこと」2 人、「同行してくれる人探し」1 人という回答が見られた。

観光地への移動､帰りを含む移動中に困難に直面したことがあるかに関する質問に対しては、7 人があると答えた（4 人はないと答えており、1 人からは回答が得られていない)。移動中の詳細（複数回答）について、移動・交通における施設（駅構内等）のバリアフリー化が進んでいない（十分ではない)」7 人、「移動・交通における移動手段（電車の車両等）のバリアフリー化が進んでいない（十分ではない)」5 人、「移動・交通における情報へのアクセスのバリアフリー化が進んでいない（十分ではない)」4 人、「「周りの配慮が足りない（十分ではない)」4 人、「リラックスできず、移動すること自治アが好きではない」2 人、「その他」1 人という結果が得られた。その他を選択した回答者からは、「電話を下りる時、スロープをお願いしていたのに係の人が見えなくて大変困った。休日は駅のホームも大混雑で、車イスで移動する時など人にぶつからないかとても神経を使って疲れてしまう。」という意見があった。

旅行・観光の最中の困難に直面したことがあるかという質問に関しては、10 人があると答えた（2 人はないと回答)。その詳細については（複数回答)、「歩道、商店街等を含む観光地（地域）のバリアフリー化が進んでいない（十分ではない)」8 人、「見学等で訪れる観光施設のバリアフリー化が進んでいない（十分ではない)」6 人、「飲食及び土産物店等の施設のバリアフリー化が進んでいない（十分ではない)」5 人、「宿泊施設のバリアフリー化が進んでいない（十分ではない)」5 人、「周りの配慮が足りない（十分ではない)」3 人、「周りの人（介助者を含む）に気兼ねてしまう」1 人、「その他」2 人という回答が得られた。その他には、「移動」「エレベーターが混んでいて、車イスでは乗れないときがあり、何回も見送ることがある。混雑時は、車イスやベビーカー専用のエレベーターが 1 台あると助かる。」という意見があり、旅行・観光の最中においても「移動」自体が阻害要因になっていることが確認できる。

旅行・観光において最も苦労する段階については、「観光・旅行の最中」7 人、「観光地への移動及び帰り」4 人、「準備・計画」1 人という回答が見られた。

どのような点が改善されれば、今より旅行・観光しやすくなると思うかという質問の回答（5 つまで選択するように要望した）を回答数が多かった順で並べると、「見学等で訪れる観光施設のバリアフリー化」8 人、「旅行・観光情報へのアクセスの改善」7 人、「宿泊施設のバリアフリー化」7 人、「バリアフリーツアー等のパッケージツアー（募集型企画商品）の費用の低廉化」5 人、「移動・交通における移動手段（電車の車両等）のバリアフリー化」5 人、「歩道、商店街等を含む観光地（地域）のバリアフリー化」5 人、「より安定した収入の確保」4 人、「移動・交通手段の情報へのアクセスの改善」4 人、「移動・交通における施設（駅構内等）のバリアフリー化」4 人、「障害（者）に対する周りの理解の深化」4 人、「同行者の確保」3 人、「バリアフリーツアー等のパッケージツアー（募集型企画商品）のバリエーションの増加」3 人、「余暇時間の確保」2 人、「飲食及び土産物店等の施設のバリアフリー化」2 人、「その他」1 人という回答が見られた。その他には、「バリアフリー・トイレが少ないため、増設を。」という記述があった。

２）インタビュー調査結果

身体障害者からは、宿泊施設のバリアフリー化が十分に進んでいないことや、日常においても電車やバスを使い移動する際に職員に依頼し待機する時間を考え早めに移動する必要性に関する言及があった。また、道やバスのステップを含む段差や傾斜がバリアになることが多く、また視覚障害者にとって必要不可欠な点字ブロックが肢体に障害がある B の場合、歩きづらさ

を感じる要因にもなっていることも確認した。また、B によると、車いす等を利用しないこともあり、電車で優先席に座っているとある人に席を譲ってほしいと言われ、友人が B は障害をもっていると口喧嘩になった経験も語られる場面もあった。そこで自分の障害と改めて向き合わないといけないことに対する辛さ（障害の再認識）を覚えたことも言及していた。そして軽度の障害であっても、その障害のことで自分が行きたいと願っていた学校（所属校以外の交換留学プログラム）で学ぶことができないのではないかという不安等も語られた。

A は、短期留学の際、バリアフリーであることを宣伝しているホテル（宿泊施設）を予約し現地に行ったら、部屋に入るまでのバリアフリー化が進んでいない等の理由から、そのホテルではなく別のホテルを急遽手配した経験を語った。

他方、観光業者からすれば、バリアフリー旅行商品の低廉化やバリエーションの拡大が現実的に容易ではないことがあるという。バリアフリー化の先進地域と知られている岐阜県高山市のあるホテル（宿泊施設）でのインタビュー調査では、バリアフリーの部屋を行政の財政的補助もあって進めてきたが、一定の数が確保されていることもあり、バリアフリー部屋を増やす計画はなく、ホテル全体の経営縮小の流れのなか、バイアフリー大型入浴施設が閉鎖されるケースも確認した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　１　件）
１．身体障害者の観光における経済的阻害要因に関する考察、共著（韓準祐・柳銀珠)、多摩大学グローバルスタディーズ学部紀要 11 号、1－11 頁

〔学会発表〕（計　１　件）
１．沖縄本島北部地域の宿泊施設におけるバリアフリー対応の特徴、共著（柳銀珠・韓準祐)、韓国日本近代学会国際学術大会

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）
○取得状況（計　　件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。